京都府近代和風建築総合調査

文化遺産部建造物研究室では、現在、京都府内の近代和風建築の調査を、京都府からの受託調査事業として実施しています。京都近郊４大学による府全域の悉皆調査を経て、200件あまりに絞り込まれた重要物件の詳細調査が、受託内容になります。この調査は文化庁からの補助を受けておこなわれている事業で、都道府県単位で順次実施されており、京都府はいわば残された大物でした。

奈文研が近代の建築を調査するということを意外に思われる方があるかもしれませんが、実は結構経験があります。近代化遺産調査として秋田県、鳥取県、近代和風建築調査として滋賀県、鳥取県で調査の実務をすでに担当し、成果を挙げてきました。

この「近代和風建築」ということばには、聞き慣れない響きを感じられることでしょう。明治から昭和初期にかけて、伝統技術ないし伝統を意識した造形により建てられた建築群を一括りにして、建築分野でこのように呼ばれています。「和風」という語は、今はごく一般的ですが、建築に限れば、実は近代になってから使われ始めたことばです。幕末に日本に導入された西洋建築を「洋風」と呼び始めると、逆に日本にすでにあった建築を一括りにする語が必要となり、「和風」の語が登場したわけです。そこにさらに「近代」が付加された「近代和風」は、二重に近代が意識された語ということになります。

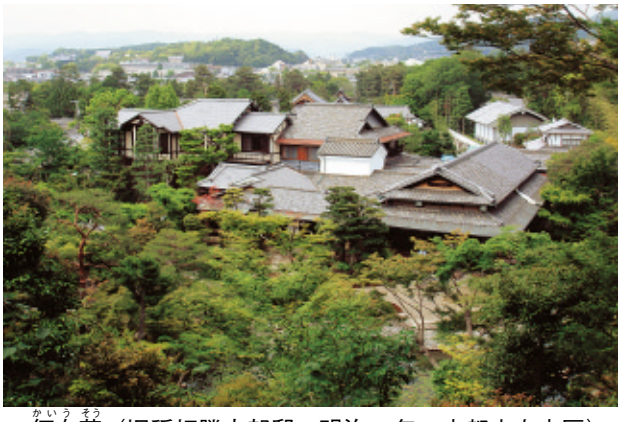
これは、近代建築の研究が、洋風のみ先行して進められてきたことと関係しています。近代＝洋風という先入観がまず形成され、「和風」の語は、伝統的な形態全般を指す、緩やかな概念として認識されるようになりました。近代における和風建築というと、時代遅れの保守的なもの、といった程度の受け止め方しかなされなかったのに対し、1980年頃よりその価値を再認識した研究者たちが、こうした先入観を打ち破るべく、あえて「近代和風」という少々くどい語を造語したのでした。つまり、「近代和風」という概念は自明なものではなく、いまもって、今回のような調査を実施しながらその輪郭を描いていくべき、研究途上にある概念なわけです。

さて、京大工、京普請といえば、すぐに数寄屋普請のイメージが浮かぶように、京都の近代和風建築というと、なんと言っても数寄屋造の邸宅群を挙げねばなりません。南禅寺旧境内、嵐山周辺などには、珠玉の別邸群が数多く現存しています。政治家や、住友、野村、三菱といった旧財閥、繊維・織物業関係者、画家など、名だたる名士の別邸が、植治（うえじ）に代表される庭師による広大な庭をともなって、きら星の如く立ち並ぶ様は、圧巻の一言に尽きます。京都の近代数寄屋は、京大工と新興富裕層との出会いによって花開きました。派手さを好まず、端正な比例、嫌みのない樹種の取り合わせによる、一見簡素ながら、隙のない濃密な空間をその特徴とします。また、構造的創意を背後に隠したさりげない開放感も、その奥深い伝統を彷彿とさせます。

数寄屋造と双璧をなすのが、社寺の建築です。京都の有名社寺には、意外なほど多くの近代の建物があります。東本願寺、東福寺、金戒光明寺、仁和寺など、枚挙にいとまがありません。京都は明治30年より開始された古社寺修理の中心地の一つでした。その監督技師を勤めた建築家たちは、古社寺の造形に学び、古代中世を復興しつつ、西洋建築をも含めて各時代、様式を自在に折衷した新しい表現を生んでいきました。古都としての京都のイメージには、意外に近代の造形が寄与する面が多いわけです。

洛中の代名詞ともいえる京町家も、調査対象となります。市内中心部は元治の大火（1864）で大半を焼失したため、京町家は実はほとんどが近代和風建築なのです。そしてもちろん、京都市以外の丹後、丹波、山城南部にも個性的な建物が数多く残されています。

京都は近代和風建築の典型を、各類型、まんべんなく伝える希有な地です。その魅力を存分に表現することで、近代という時代への多様な解釈を生む震源地となるような報告書の出版をめざし、日夜努力中です。　　（文化遺産部　清水 重敦）



何有荘（かいうそう）（旧稲畑勝太郎邸、明治44年、京都市左京区）